

目 次

序文
写真

1 巡回指導調査団の派遣

1-1	調査団派遣の背景	1
1-2	調査団の派遣目的	1
1-3	指導・調査項目	2
1-4	団員構成	2
1-5	調査日程	2
1-6	主要面談者	4

2 関係政府機関からの意見聴取

2-1	首相府投資協力委員会	6
2-2	保健省	6
2-3	ヴィエンチャン特別市保健局	6
2-4	サバナケット県庁	8

3 保健医療分野隊員の技術指導

3-1	ボリカムサイ県立病院	9
3-2	サバナケット県立病院	11
3-3	サバナケット県保健局補助看護婦助産婦学校	12
3-4	ヴィエンチャン特別市サイタニー郡病院	14
3-5	セタティラート病院	15
3-6	ヴィエンチャン特別市シーコッタボン郡病院	16
3-7	国立マホソット病院	17
3-8	医療技術短期大学	18
3-9	国立友好病院	19
3-10	技術指導の総括	20

添付資料

1	ラオス隊員配置図（全隊員）（1998年12月現在）	23
2	ラオス隊員配置図（保健医療分野隊員）（1998年12月現在）	24
3	ヴィエンチャン特別市保健局公衆衛生課業務概要及びシニア隊員業務内容案	25
4	ヴィエンチャン特別市シーコッタボン郡病院パンフレット	27

1 巡回指導調査団の派遣

1-1 調査団派遣の背景

ラオス国では1999年3月現在13名の保健医療分野隊員が活動しており、全派遣中隊員の約25%と大きな割合を占めている。これは、同国における医療水準が低く、基礎看護技術の普及及び地域医療の充実が強く求められているためであり、保健医療分野における基盤整備は援助重点課題のひとつともなっている。

隊員は公立・国立の病院に配属され、看護婦、助産婦、検査技師等医療従事者の育成、衛生知識の普及等に取り組んでいる。その草の根レベルにおける活動はラオス側から高い評価を得ており、今後とも継続的な協力が期待されている。

このような状況を踏まえ、今年度、保健医療分野における隊員巡回指導調査団の派遣がラオス事務所から要請された。隊員の活動現場を巡回し、隊員が現在抱えている問題点を把握して専門的な見地から助言を与えることは、今後の隊員活動を効果的かつ円滑な展開のために非常に重要である。特に、近年保健医療分野隊員は、現場スタッフの基礎的医療技術の充実と病院内の中堅的人材の育成を図るため、配属先のカウンターパート（以下C/P）を集めて医療セミナーを定期的で開催している。このような隊員間の横の連携を今後活かしていくためにも、今後の保健医療分野隊員の活動の進め方について、方向づけを行うことが必要となっている。

また、今年度から2年間継続が決定されたフロントライン計画の現在の実施状況について確認し、予算運用にあたっての課題を聴取することが、同計画の今後の円滑な実施に向けて必要であると考えられる。

以上の経緯により、ラオス国へ以下のとおり保健医療分野における青年海外協力隊員巡回指導調査団が派遣された。

1-2 調査団の派遣目的

- (1) ラオス国へ派遣中の保健医療分野隊員への技術指導を行うこと。
- (2) ラオス国政府関係機関から現在の隊員活動に対する評価及び今後の派遣要望を確認し、今後の隊員配置計画について協議を行うこと。
- (3) ラオス国におけるフロントライン計画の実施状況を確認すること。

1-3 指導・調査項目

- (1) 派遣中の保健医療分野隊員への技術指導
 - ・活動現場の実情
 - ・C/Pの配置状況、技術レベルの実態
 - ・これまでの活動成果と問題点の確認
 - ・上記を踏まえた隊員活動への技術指導
- (2) ラオス国政府関係機関の要望等の確認及び協議
 - ・ラオス国の保健医療事情
 - ・保健医療分野におけるラオス国の隊員要請・活用方針
 - ・配属先の要望、受入体制の実態と方針
- (3) フロントライン計画の実施状況の確認
 - ・これまでの成果と問題点
 - ・供与機材の管理・利用状況
 - ・配属先及び隊員からの要望

1-4 団員構成

- (1) 団長・技術指導
戸塚 規子（青年海外協力隊事務局 技術顧問）
- (2) 協力企画
望月 恵美（青年海外協力隊事務局派遣第一課 ラオス国担当）

1-5 調査日程

月日	曜日	調査行程	宿泊先	移動手段
3月8日	月	16:20 成田発 21:10 バンコク着	バンコク	NH-915
9日	火	08:20 バンコク発 09:30 ウェンチャン着 JICA事務所長との昼食会・打ち合わせ 14:00 投資協力委員会（CIC）表敬 14:45 保健省表敬 15:30 ウェンチャン特別市保健局表敬	ウェンチャン NOVOTEL HOTEL 21-213-570	TG-690

月日	曜日	調査行程	宿泊先	備考
10日	水	08:00 ウェンチャン発→ホリカムサイへ 10:00 ホリカムサイ隊員活動現場視察 ホリカムサイ県立病院：大庭智恵(助産婦) 岩田和子(看護婦) 11:00 パクサン高等学校：西村豊(木工) 14:00 ホリカムサイ発→カムアンへ	カムアン SISAN KHAMMOUN HOTEL 41-212-371	陸路移動
11日	木	08:15 カムアン隊員活動現場視察 カムアン県農林局：波多野育代(農業土木) 松浦誠吾(稲作) 09:00 カムアン→サハナケットへ 14:30 サハナケット県庁表敬 15:30 サハナケット隊員活動現場視察 サハナケット県立病院：渡利幸子(看護婦)	サハナケット NANHAI HOTEL 51-212-216	陸路移動
12日	金	08:30 サハナケット看護学校：内田真紀(看護婦) 10:00 KM35農業支援センター：林田学(稲作シニア) 芦沢甲太(農業土木) 14:00 技術短期大学：田口真二(システムエンジニア) 小材幸聖(自動車整備)	サハナケット NANHAI HOTEL 51-212-216	陸路移動
13日	土	08:00 サハナケット発→ウェンチャンへ 15:30 (ウェンチャン着)	ウェンチャン NOVOTEL HOTEL	陸路移動
14日	日	資料整理	ウェンチャン NOVOTEL HOTEL	
15日	月	09:00 日本大使館表敬 11:00 ウェンチャン隊員活動現場・隊員要請機関視察 サイタニー郡病院：有江ミサ子(看護婦) 14:00 セクテイラート病院：楳清美(臨検技師) 15:00 シーコックホン郡病院：隊員なし。	ウェンチャン NOVOTEL HOTEL	
16日	火	08:30 国立マホット病院：萩原智子(看護婦) 09:40 医療技術短大：三浦隆史(臨検技師シニア) 10:40 国立友好病院：隊員なし。 14:00 JICA事務所への報告	ウェンチャン NOVOTEL HOTEL	
17日	水	10:30 ウェンチャン発 11:40 バンコク着 22:45 バンコク発	機内泊	TG-691 NH-916
18日	木	06:15 成田着		

1-6 主要面談者

投資協力委員会 (CIC)

Mr. Soulasith Oupravanh (二国間協力局次長)
渡辺 肇 (JICA専門家・援助調整)

保健省

Mr. Phoukhong Chommala (渉外課課長)

ヴィエンチャン特別市保健局

Dr. Chanphomma Vongsamphanh (局長)
Dr. Ratthiphone Oula (プライマリーヘルスケア課課長)

サバナケット県庁

Mr. Soukaseum Bodhisane (副知事)
Mr. Bouakham Sisoulath (援助調整官)

ボリカムサイ県立病院

Dr. Bouchamb Keomavong (院長)

パクサン高等学校

Mr. Khamphay Chanthavong (教頭)
Mr. Somngoth Inthavonsa (技術科教師)

カムアン県農林局

Mr. Bunchan Saiphannya (事務長)

サバナケット県立病院

Dr. Phokham Phrasithideth (院長)
Dr. Vatsna Sopraseuth (臨床検査技師長)
Dr. Bouathong Say (集中治療科医師)

サバナケット県保健局補助看護婦助産婦学校

Ms. Bouabay (副校長・C/P)

サバナケット技術短期大学

Mr. Khambone Chanthavong (校長)
Mr. Bounleuth Vondsouvanh (副校長)

ヴィエンチャン特別市サイタニー郡病院

Dr. Boutthanong Xongchacsin (副院長)
Ms. Daovy Thanthalasy (母子保健科婦長・C/P)

セタティラート病院

Dr. Khampe Phongsavath (副院長)

Mr. Khamla Akharath (臨床検査科細胞検査室技師・C/P)

ヴィエンチャン特別市シーコッタボン郡病院

Dr. Keovongxay Phetdavanh (院長)

Dr. Chanthavong Viengvilay (副院長)

国立マホソット病院

Dr. Aratsay Chandara (病理検査室医師・C/P)

Dr. Sangvath Luangkhoth (血液検査室医師)

Ms. Khampetchan Thaboune (集中治療室婦長)

Ms. Lamngeune Silavong (救急外来看護婦)

医療技術短期大学

Dr. Tanoi Srithirath (校長)

Mr. Onekham Savongsy (臨床検査学部副主任・C/P)

国立友好病院

Dr. Douangchan Vanthanouvong (院長)

Dr. Khamia Liankhammy (臨床検査室医師)

日本大使館

長野 誠司 (二等書記官・協力隊担当)

JICAラオス事務所

高畑 恒雄 (所長)

高木 直喜 (協力隊調整員)

吉村 卓 (協力隊調整員)

2 関係政府機関からの意見聴取

2-1 首相府投資協力委員会（CIC）

調査団から今回訪問の趣旨を説明し、今後の保健医療分野への協力隊派遣への要望を確認したところ、担当者よりヴィエンチャン市内の病院への派遣を要望するとの発言があった。市内の病院には医療機材が不十分な病院が多く、それらへの支援はもちろんのこと、医療機材が整っている病院へも協力を検討してほしいとのことである。というのは、病院によっては他の援助機関からの援助により医療機材は整っていても、それを使うことのできる人材が少ないため、病院としての機能が十分果たせず、重病患者は最終的にタイへ治療へ行かざるを得ない状況にある。ついては、これらの病院において、医療機材を操作できる人材の育成及び基礎的看護技術の充実を図るため、看護婦等の派遣を望むとのことであった。

これに対し調査団からは次のように回答した。中央における医療設備の充実（人的、物的両面）も重要であるが、医療サービスに恵まれない地方への協力も重要と考える。また、ヴィエンチャン特別市保健局へシニア隊員を派遣し、特別市の郡病院全体における医療水準の向上へ協力する計画もある。ヴィエンチャン市内の病院への隊員派遣は、限られた予算、人材の中で、これらの協力との優先度を比較しながら検討したい。

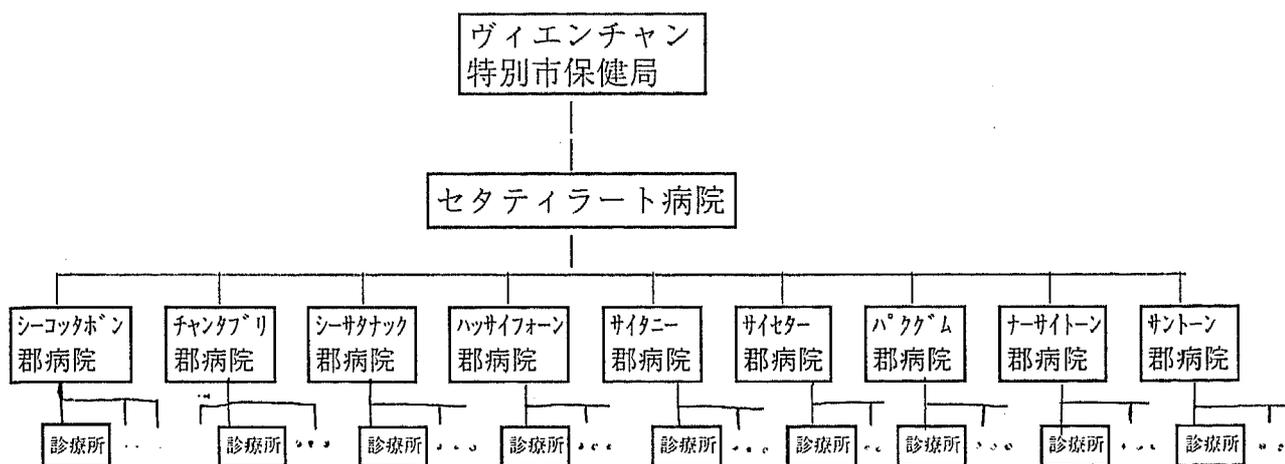
2-2 保健省

担当者からこれまでの草の根レベルにおける隊員活動に対し感謝するとの発言があった。社会適応もスムーズで、適切な技術を移転する協力隊の活動は、ラオスにとって非常に有効であり、特に、フロントライン計画による貢献はラオスの病院にとって非常に効果的なものである。これからも可能な限り多くの隊員を受け入れたいとのことであった。

また、ヴィエンチャン特別市保健局へのシニア隊員の派遣については、市の事業は市の自治権に従って運営されているため、保健省からは特に意見はなく、同市保健局とよく相談し、同市のニーズを汲み入れながら進めてほしいとのコメントのみあった。

2-3 ヴィエンチャン特別市保健局

ヴィエンチャン特別市保健局は、同市の保健行政を司る最高機関である。同局は、公衆衛生課、母子保健課、医薬品課等の部門に分かれ、各課が連携を取りながら同市の保健医療業務を行っている。また、同市は9つの郡から成り立っており、保健局は各郡病院及び郡病院の下部に位置する35の診療所の指導・統括を行い、同市全体の保健医療水準の向上に努めている。以下が同市医療機関の組織図である。



各郡病院管轄下の診療所数等は、同市保健局の統計（1996年）によれば以下のとおり。

郡	診療所数	村数	人口
シーコッタボン	2	59	72,602
チャンタブリ	0	37	57,870
シーサタナック	0	40	57,050
ハッサイフォン	7	57	46,596
サイタニー	8	99	96,832
サイセター	4	51	70,765
パクグム	8	53	33,667
ナーサイトーン	3	55	43,593
サントーン	3	35	16,401
(合計)	35	486	495,376

ヴィエンチャン特別市の医療機関へのこれまでの隊員派遣は、各郡病院の上位に位置し各郡病院を支援・指導する立場にあるセタティラート病院に対するものが中心である。同病院には看護婦・助産婦等の隊員10名の派遣実績があり、現在も臨床検査技師隊員が活動中である。セタティラート病院以外では、2つの郡病院へ看護婦・助産婦等の隊員を3名派遣した実績があり、現在も看護婦隊員1名が活動中である。隊員はそれぞれの配属先において医療技術者の育成に努めている他、各配属先のC/Pを集め、定期的に医療セミナーを実施している。隊員の草の根レベルでの活動は各配属先から非常に高い評価を得ているが、特にこの医療セミナーの実施により、C/P間の情報交換が促進され、各郡病院間の横の連携が生まれつつある。

これらの流れを受け、ヴィエンチャン特別市保健局では、従来の点的な隊員派遣にとど

まらない同市全体の医療水準の向上を目標にした面的な協力を期待し、保健局各課の調整役となっている公衆衛生課へのシニア隊員の派遣を要請した。当該シニア隊員が派遣された場合は、公衆衛生課のスタッフと共に、他課と連携を取りながら、同市内の保健医療事業計画の立案及び実施の促進を図ることが期待されている。調査団は、このシニア隊員の派遣要請を踏まえ、同市保健局を表敬訪問した。

保健局長からは、これまでの協力隊員の活動に関し、各種マニュアル整備やスタッフ研修等を行いながら各配属先病院の改善に多大な貢献したことに感謝の意が表明された。また、これからも各郡病院へ隊員を1名ずつ派遣してほしいとの要望があった。これに対し調査団から、平成10年度秋募集の結果新たに隊員が確保され、今後9つ中5つの郡病院において隊員が活動する予定であることを説明したうえで、他の4つの郡病院への派遣は、生活環境、緊急時対応を含め、引き続き調査を行いながら検討していきたいと回答した。

次に、保健局にシニア隊員が派遣された場合、当該シニア隊員のC/Pとなる予定の公衆衛生課課長から、シニア隊員への強い期待表明があった。同課では、現在、スタッフが調整員となって、各郡病院及び診療所を巡回し、巡回を通じて明らかになった問題について保健局の他課と協議し対応策を検討していく役割を担っている。これまでの公衆衛生課の活動は、地理的な条件（一番遠い郡病院で市の中心地から55km）やスタッフの多忙さもあり、各地域が抱える問題点の確実な抽出に至っておらず、シニア隊員の派遣により、より効率的・効果的な事業運営を目指したいとのことであった。

公衆衛生課の主な業務やシニア隊員へ期待される業務内容の詳細については、添付資料3（25～26ページ）参照。

2-4 サバナケット県庁

副知事から、サバナケット県に入っている援助機関の中で、協力隊は中心的な役割を占めており、これまでの協力隊員の活動について深く感謝するとの発言があった。協力隊員は非常に活動に熱心で、ボランティア精神豊かであり、その姿勢を見習うようラオス人スタッフへ常に言っているとのことである。今後とも隊員の協力、特に農業・保健医療分野での活躍を期待し、現在サバナケット県で実施中のKM35プロジェクトもぜひ成功させたい等、今後の継続的な協力を強く要望された。

3 保健医療分野隊員の技術指導

ラオス国における保健医療分野の隊員は、現在7病院1看護学校で12名の隊員が、また医療技術短大で1名のシニア隊員が活動している。今回は、ヴィエンチャン及び南部地域の隊員が活動している7施設と、派遣予定の2施設を視察し、6名の隊員に技術指導を行った。また、第5回看護セミナー開催に向けて行われる、保健局及び担当病院のマホソット病院看護部との会議のため上京した原田美智子隊員（9年度2次隊・助産婦、シェンクアン県立病院）とも会うことができた。訪問した各施設の現場の状況、活動成果と問題点、行った技術指導について、以下に訪問順に述べる。

3-1 ボリカムサイ県立病院

- ・派遣中隊員 ：大庭 智恵（9年度3次隊・助産婦・1代目）
 岩田 和子（10年度1次隊・看護婦・1代目）
- ・面談者 ：Dr. Bouchamb Keomavong（院長）

両者とも同病院への新規派遣隊員であり、訪問時、大庭隊員は配属後11ヶ月、岩田隊員は7ヶ月を経過していた。

（1）現場視察の概要

院長と隊員を交えて隊員活動及び問題点を中心に面談の後、院長の案内でMCH（母子保健部）、外来、手術室、救急・ICU及び隊員の活動場所である産科、外科病棟を視察した。病院規模は70床で病床利用率は年間平均50%前後である。

隊員は赴任以来、院内清掃と感染予防を活動の中心課題としている。これによって院長は最近掃除夫を雇い入れており病室や廊下は掃除が行き届いている印象を受けた。産科分娩室では分娩終了直後で助産婦が縫合処置中であつたが、清潔操作にかなり問題があるように見受けられた。手術は虫垂切除、交通外傷、帝王切開程度である。外科病棟は院長を含む2名の外科医のみで多忙とのことであるが、抜糸をせず退院し創の感染、膿瘍形成等で再入院が多い。岩田隊員は創部のドレッシング方法の改善に取り組んでいる。現在の方法は医師の処置後すぐにガーゼで覆わずにすべての患者の処置が終わった後、順にガーゼを当てていくため、創部が汚染しやすく患者も苦痛である。また、病室ベットはシーツがなくマットの上に直接臥床しているため清潔が保てない。今後フロントラインにてベッドシーツの導入を検討しており、導入後に洗濯夫を雇うという約束を院長としている。

（2）活動成果と問題点・技術指導（院長との面談及び隊員への助言の概要）

院長から、両隊員の活動は看護職員への技術指導と業務上不足している物の援助であ

ると理解しているが、協力隊事業の目的について自分はまだ十分理解していないかもしれないとのコメントがあり、隊員は派遣されたもののその活用の仕方についてとまどっている様子が見受けられた。両隊員にはスタッフと実務を共に行いながら、現在病院の清掃、患者ケア、器具の消毒について技術指導を行ってもらっているが、ラオス人の仕事は遅く、まだあまり改善されていない。スタッフは家庭内の仕事などで勤務を休みがちであり、なかなか隊員の活動についてくる者がいないが、このような状況下、隊員はよくやってくれていると活動を評価するコメントがあった。これに対し、調査団から、院長の協力隊事業への理解及び姿勢は望ましいものであり、今後も継続した派遣を希望するのであれば隊員の活動環境の整備に協力願いたいことを伝えた。

また、院長から機材援助の要請があった。隊員からも、病院側は医療機材等の要望が強いとの情報が訪問前にあったが、これを踏まえ調査団から、機材援助については隊員の活動（看護業務・患者ケア改善）のために必要な範囲内で、隊員とよく相談してほしいと伝えた。

現在隊員が抱えている問題は、C/Pが事実上不在であることである。C/Pである総婦長は、もともと隊員活動への理解が低いうえに病院にはほとんど居らず、さらに語学(英語)研修でしばらく病院には来ないことになっている。

両隊員はこの点についてすでに1度、総婦長と膝詰め話し合いを行っており、協働なしに活動は困難であること、場合によっては任地変えも考えたいことを伝えたが、確たる回答は総婦長からはなかったとのことである。調査団から院長へこの件に関する見解を確認したところ、院長は、総婦長は同病院に入っているGTZ派遣の助産婦やVSO派遣の英語教師への対応を担当しているため多忙であるとコメントしたが、総婦長が隊員と良い関係でない状況は把握している様子であった。院長から改善策として、総婦長をC/Pとするのが困難なら病棟婦長レベルで他にC/Pを決めたい、隊員にも一緒に考えてほしいとの申し出があり、隊員がそれに対し前向きな姿勢を示したことから、調査団としてはしばらく様子を見てよいのではないかと判断した。

隊員に対しては、院長とよく相談するよう助言し、院内の清掃については院長が掃除人を雇うなど積極的であり、業務検討のために開始した婦長会議も週1度継続しているなど、隊員の新規派遣1年足らずでかなり前向きな変化が病院側に見られること、むしろ隊員が結果を急ぎすぎているようにも感じることを他国の例も出しながら話した。そして、隊員が現在手掛けている外科のガーゼ交換の改善、助産の清潔手技、ベトリネンの導入等を焦らずに続けてみるよう助言した。両隊員は、以前総婦長とかなり徹底的に話したことで気持ちは落ち着きを取り戻していたようで、これまでは焦りもあったかもしれないがしばらくこのまま活動を続けるとの発言があった。今後は三浦シニア隊員が時々立ち寄るよう心掛けることを約束した。隣接のパクサン高校で活動中の西村豊隊員（9年度2次隊・木工）も両隊員が焦りぎみではないかとの感想をもっており、日頃の良い助言者に

なっているようであった。

(3) フロントライン機材の活用度

今年度初めて、ベッド用シーツ、洗濯機、ドップラー（小児用聴診器）を申請した。まだ導入されていない。

3-2 サバナケット県立病院

- ・派遣中隊員 : 渡利 幸子（10年度2次隊・看護婦・1代目）
- ・面談者 : Dr. Phokham Phrasithideth（院長）
 Dr. Vatsana Sopraseuth（臨床検査技師長）
 Dr. Bouathong Say（集中治療科医師）

同病院へはこれまで、助産婦を1名、臨床検査技師を3名（一般隊員及び短期緊急派遣隊員）派遣した実績があるが、看護婦については渡利隊員が初代の派遣である。同隊員は配属後まだ1ヶ月足らずであり、現在は配属先の看護方法について観察している状況にある。なお、今後同病院へは、10年度3次隊にて臨床検査技師、診療放射線技師を各1名派遣予定。

(1) 現場視察の概要

院長と主なスタッフが会議室に参集しており、最初に院長からOHPで病院の患者数、診療内容、職員の現況について説明があった。また、最近の医療職教育制度の変化について、下級医師（補助医師）の教育が廃止され、中級看護婦（日本の看護婦レベル）を増やす方向である（現在、病院看護婦のほとんどは日本の准看護婦と同レベルの下級看護婦である）と説明があった。

今後の隊員派遣に関する期待は、世界銀行の借款で病院改築ができ、今後は臨床検査、X線検査室、ICU、手術室の技術向上を希望している。院内は院長の案内で、渡利隊員の活動するICU、滅菌消毒室・手術棟（内部整備は完了しておらず、機材搬入時期も未定）およびX線撮影室を見学した。

同病院は190床のベッドを有するが、その内、渡利隊員の活動するICUは救急対応ベット6床を含む11床である。心不全、急性下痢症、肝不全、交通外傷が多く、救急ベットで処置・観察の後、ICUあるいは一般病棟に入院するという日本の二次救急病院並みの方式をとっている。ICUに機材はベネットPR2の人工呼吸器があるが故障中である。X線撮影室は単純撮影室2室と現像室のみで、撮影機はかなり古い。

(2) 活動成果と問題点・技術指導（院長との面談内容及び隊員への助言）

渡利隊員のC/Pは、現在ICUの医師である。しかし、隊員はC/Pとして副看護部長を希

望しており、これは看護スタッフの指導上必要なことと思われたので、ICU業務の特性から医療・看護両面の協働が必要と指摘し、兩名をC/Pとすることで院長の了承を得た。

渡利隊員は当面清潔操作に活動の重点を置きたいと考えている。しかし、手術室を含む院内の滅菌業務は小型のスピードオートクレーブが1台稼働しているだけで、ロシア製の2台は使用不能である。世界銀行援助による機材購入リストに入っていないければフロントライン供与機材として申請したいが対象になるかとの相談があった。これに対し、小児産科領域の手術もあることから申請はできると考えるが、JICA事務所と相談するよう助言した。また、現在人工呼吸器の新規購入の必要は感じないが、ベネットPR2が部品調達等、修理が可能かどうかの確認依頼と、人工呼吸器ケアマニュアル（学研出版）送付の希望があり、調査団が帰国後対応することを約束した。

（3）フロントライン機材の活用度

臨床検査技師隊員が活動時に、県内の学童検診用に以下のものを導入。現在も継続して使われている。

- ・コンピューター（デスクトップ2台、ノート型1台、プリンター）
→主に検査室全体のデータ処理用で、学童2500人分のデータが入っている。データのは臨床検査技師隊員のC/Pが行っている。
- ・自動血球計測装置
- ・その他、スライドグラス、試薬等の消耗品を購入し、検診時に活用した。

3-3 サバナケット県保健局補助看護婦助産婦学校

- ・派遣中隊員 : 内田 真紀（10年度1次隊・看護婦・1代目）
- ・面談者 : Ms. Bouabay（副校長・C/P）

内田隊員は同校への新規派遣隊員であり、配属後約7ヶ月を経過していた。訪問時、副校長と今後の隊員活動等について協議した後、校内を視察した。

（1）現場視察と学校の概要

本校は、以前は補助医師と補助看護婦（サントーン、高卒2年教育）の養成校であったが、1997年に補助医師の養成制度が廃止されて以来、看護教育のみを実施している。現在学生数は1年生42名、2年生28名である。職員は校長（医師）1名、副校長（補助医師と看護婦）2名を含む24名、うち看護教員は副校長のほか3名のみでうち1名は現在タイの上級学校に留学中、14名は医師か補助医師、6名が事務職である。看護教員の選考は学校幹部会議で行われ、出席者合意のもとで採用する。基準は成績の良い者で臨床経験は特に問わない。看護教員は主に講義を行い、実習指導はほとんどが補助医師によって行なわれている。

る。副校長によれば、実習指導に看護教員があたらないことに問題は感じているが補助医師科廃止後の教員の職場を確保する必要がある、当分改善の見込みはないとのことであった。

また、上級・中級看護婦が不足しているとのことであり、上級看護婦（サンスーン、大卒）は国内で9名、中級看護婦（サンカーン、高卒3年教育）はサバナケット県内で22名であり、そのほとんどは病院の管理職である。この背景として、ラオス国内には補助看護婦助産婦養成学校が、サバナケット県を含め全部で5校あるが、一方、サンカーン養成校はヴィエンチャンに1校のみ（三浦シニア隊員配属先）、サンスーン養成校にいたってはラオスにはないので他国（主にタイ）へ留学しなければならないという、看護教育校の不足が影響しているものと思われる。

校内では1年生が授業中であり、2年生は地方の病院へ実習のため泊り込んでいるとのことであった。図書室は、英語の科別看護技術書、ラオス語参考書が2面の書棚にわずかにある程度で、学生は教師の板書をノートするだけで各自に教科書はない。看護演習室はベット3台それぞれに外国製と思われる演習人形が置かれており、どれも古いが沐浴人形なども揃っている。学内演習はあまり行わず直接病院実習を行うことが多いとのことである。

（2）活動成果と問題点・技術指導（副校長との面談内容及び隊員への助言）

副校長の隊員評価と期待は、内田隊員を相談役として何かあれば相談しながら対処しており、考えが複数になることによって良い考えや方法がみつき助かっているとのことであった。一方、次のように隊員活動とは直接関係しない援助に対する期待が強いと見受けられた。学生は全寮制であり、教育環境整備として寮生活の改善が必要、よって宿舍の建て替えと、自炊の食料買い出しの手間を学習時間に当てさせるためにも冷蔵庫の設置が必要なので援助を希望するとのことであり、これに対しては、協力隊活動の範囲を超えるので別に考えてほしいことを伝えた。

内田隊員は、現在、教科内容が不十分であるところに着目し、不足している清潔操作・感染予防などの基礎的看護技術に関する教科書を作成しておりまもなく完成する。支援経費で全学生に配布できるようにして教授するとともに、臨床実習指導に活用していく予定を立てている。実習場（サバナケット県立病院）の現状は、看護学生が看護婦の補助のための労働力として使われている状況であり、指導方法の統一と内容の充実が必要である。指導教員は補助医師が多いため指導要項を作成して実施していくことで変化が期待できそうとのことであった。いままで学校の方針は実習にあまり重きを置いていなかったが、この度、内田隊員が実習場に出向くことにC/Pからの同意が得られたことにより、今後の活躍が期待される。

（3）フロントライン機材の活用度

これまで導入されたものはない。

3-4 ヴィエンチャン特別市サイタニー郡病院

- ・派遣中隊員 : 有江ミサ子 (8年度3次隊・看護婦・1代目)
- ・面談者 : Dr. Boutthanong Xongchacsin (副院長)
Ms. Daovy Thanthalasy (母子保健科婦長・C/P)

同病院へはこれまで保健婦を派遣した実績がある。看護婦は有江隊員が初代で、本年4月に任期終了予定。後任は11年度2次隊にて赴任予定である。訪問時、副院長と面談した後、院内を視察した。

(1) 現場視察と病院の概要

サイタニー郡病院はヴィエンチャン特別市にある9郡病院の1つで、ベット数は内科10、救急外来3、母子保健科(MCH)3、計16床の村落型小規模病院である。1997年度の外来患者数は5217名、入院患者数は885名であり、主な疾患は、上位から感冒1161件、下痢457件、肺炎447件、咽頭炎292件、デング熱240件、回虫症179件、マラリア150件、赤痢142件、麻疹96件、肝炎20件などである。

有江隊員は任期終了間近であるが、現在母子の健康教育とピルの普及に携わっている。10年度フロントラインにて供与のクベース(保育器)は、実際に使用しながら扱いや管理を習得する必要があるため、医師と看護婦のセタティラート病院での見学実習を依頼しているが、1週間の研修期間がなかなかとれないということである。院内見学は、有江隊員の活動場所である母子保健科を中心に行い供与機材の使用状況について説明を受けた。分娩室のクベース、吸引器など機材の管理・保管はきちんと行われているようであった。

(2) 活動成果と次期隊員への病院側の期待(副院長との面談内容)

副院長の評価は、1968年から日本政府の援助を受けているが、初代の森田洋美隊員(4年度3次隊・保健婦)及び有江隊員の活動と機材の援助によって、病院のサービスや患者ケアの内容は非常に良くなった。協力隊が入ってから職員も活動的になった。看護婦の教育は、管轄の診療所のスタッフ、村のヘルスワーカーにも森田隊員の時代から熱心に関わってもらい評価している。ただ機材の申請など期日を守るように言われるが、ラオスの習慣や文化に合わせてほしいと思うとのことであった。これに対し、機材援助の申請書は期日を守らないと承認が難しいことを伝えた。

後任隊員に対しては、清潔操作と看護処置指導を中心とした救急外来と内科病棟の担当、さらに、2年後に手術室が完成するので手術業務の指導も期待している。(医師はタイへ研修に出すことができるが看護婦のための枠はない。)手術は帝王切開を中心に、虫垂切除、単純は外傷縫合程度を予定しているとのことであった。

昨年1年間で他院へ搬送した患者は62名であったが、このうち何名に手術が必要であったかは明らかでない。

(3) フロントライン機材の活用度

上記のとおり、保育器、吸引器等母子保健科を中心とした機材が導入されており、その保管、活用はラオス人スタッフと隊員の協力により円滑に行われていた。

(4) その他

ヴィエンチャン特別市保健局へのシニア隊員派遣に関連し、同シニアが各郡病院を巡回する際のC/Pとなるであろう各郡病院配属のPHCコーディネーターの活動状況について確認した。

サイタニー郡病院では、PHCコーディネーターには補助医師が任命され、月に1回管轄の診療所を巡回している。マラリア等の感染病予防指導や予防接種監督等、診療所の業務指導が主な活動で、各診療所が抱える問題点の抽出等には至っていないとのことであった。

3-5 セタティラート病院

- ・ 派遣中隊員 : 椋 清美 (8年度3次隊・臨床検査技師・2代目)
- ・ 面談者 : Dr. Khampe Phongsavath (副院長)
Mr. Khamla Akharath (臨床検査科細胞検査室技師・C/P)

同病院へはこれまで、看護婦2名、助産婦2名、診療放射線技師2名を派遣した実績がある。臨床検査技師は同隊員で2代目で、本年4月に活動終了予定。同病院では、2000年からJICAによる病院改善プロジェクトが開始予定であるため、今後の隊員派遣は予定していない。また、現在無償資金協力により新病院建設計画が進行中である。

(1) 現場視察と病院の概要

椋隊員は現在組織細胞検査室で活動中である。現在、C/Pの臨床検査技師のC/P研修の申請をしているが、日本での受け入れ先がなく、3月中に決定しないと資格がなくなることが隊員は心配していた。フロントライン計画で入れた試薬や染色用器材は有効に使用されており婦人科細胞診(子宮癌)の件数も上がっている。

(2) 活動成果と問題点(副院長との面談内容)

副院長によれば、隊員はこれまでにICU、臨床検査室、X線検査室で活動した実績があり、どの隊員も職員の知識と資質の向上に貢献し、隊員が作成したX線撮影のデスクマニュアルは現在医学生指導にも使用し有用である等、隊員活動は高く評価されている。機材供与だけではそれを使える人材は育たないが、協力隊によって職員の知識も向上し、人的面、物質面を含め病院は充実したとのことである。

今後は小児科と内科の看護を充実するために隊員を派遣してほしいとのことであった

が、隊員派遣に関しては、プロジェクト方式技術協力が始まるので現在隊員派遣計画はないことを伝えた。これに対し、隊員の計画で派遣病院を対象に行っている看護セミナーは大変有効であり、特に、教育病院であるセタティラート病院では医学教育だけでなく卒業教育も行われるので隊員のセミナーが与える影響も大きく、派遣されないのは残念であるとコメントがあった。

(3) フロントライン機材の活用度

椽隊員の活動場所に隣接する組織検査室に前任隊員が供与した滅菌シャーレ作成用の簡易無菌装置がある。現在使用されていないが、一部手を挿入する部分のフードを交換すれば使用可能と思われた。椽隊員の説明によると、気になってはいるが現在同検査室にはフランスNGOの医師が派遣されており、隊員が口を挟むことは難しい、検査室の責任者も改築移転時には処分すると言っているとのことである。この装置がなくても滅菌シャーレの作成は可能であり、改めて供与時の検討を十分に行う必要性を認識した。また、修理をすれば使用可能と思われるため、処分前に今後の継続使用についてJICA事務所とも相談しながら検討すべきと考える。

また、かつて看護隊員の入っていたICUを見学したが、供与機材については副院長も部署の責任者も把握しておらず、1台あった電動の吸引器は使用されていなかった。吸引力が弱いということであったが、同型の吸引器がサイタニー郡病院では有効に使用されていることを説明し、メンテナンスを徹底するよう助言した。

3-6 ヴィエンチャン特別市シーコッタボン郡病院

- ・派遣中隊員 : なし
- ・面談者 : Dr. Keovongxay Phetdavanh (院長)
Dr. Chanthavong Viengvilay (副院長)

同病院へはこれまで助産婦1名を派遣した実績がある。後任は11年度2次隊にて派遣予定。

(1) 現場視察と病院の概要、派遣隊員への期待（院長及び副院長との面談内容）

シーコッタボン群病院は、ヴィエンチャン特別市にある9郡病院の1つで、一般病棟5、母子保健科10床の都市部の小規模病院である。組織概要については、添付資料4(27ページ)参照。

病院側は、今後派遣予定の隊員に、院内と管轄下の診療所での技術指導と村のTBA（伝統助産婦）に対する研修を期待している。病院側では隊員のC/Pとして診療所の看護婦2名と助産婦を予定していたが、院内幹部との連携や技術移転の視点からC/Pには総婦長レ

ベルが望ましいと申し入れた結果、多々良由加利隊員（8年度1次隊・看護婦）のC/Pであった副院長（医師）と診療所の婦長をC/Pにすることになった。

病院内では母子保健科を中心に見学したが、清掃が行き届き、母親指導用の掲示物や供与機材の使用手順や保守管理要領の掲示などから業務管理が徹底している様子がうかがわれた。隊員派遣に対する期待が大きいようであり、効果が期待できると感じられた。

（2）フロントライン機材の活用度

前任隊員が母子保健を中心に活動していたことから、保育器や新生児用ベッド等母子保健科を中心に機材が導入されたが、ラオス人スタッフによりラオス語で作られた説明書が壁に貼っており、隊員帰国後もスタッフのみで問題なく活用されている状況がうかがわれた。また、導入されたコンピューター一式は院長室に設置されており、機材使用説明書の作成や、各種データ処理にスタッフが活用しているとのことである。

（3）その他

ヴィエンチャン特別区保健局へのシニア隊員派遣に関連し、同シニアが各郡病院を巡回する際のC/Pとなるであろう各郡病院配属のコーディネーターについて確認した。

シーコッタボン郡病院では、院長自らが秘書である補助医師と共にコーディネーター任務を遂行している。月2回各診療所を巡回し、予防接種指導や患者数等の各種データをチェックしている。また、診療所スタッフとは月2回定期会議を持ち、業務改善に向けた話し合いや来月の活動計画について協議している。

3-7 国立マホソット病院

- ・派遣中隊員 : 井東 さやか（9年度2次隊・臨床検査技師・2代目）
 萩原 智子（10年度1次隊・看護婦・3代目）
- ・面談者 : Dr. Aratsay Chandara（病理検査室医師・C/P）
 Dr. Sangvath Luangkhoth（血液検査室医師）
 Ms. Khampetchan Thaboune（集中治療室婦長）
 Ms. Lamngeune Silavong（救急外来看護婦）

これまで同病院へは看護婦を3名、臨床検査技師を1名、診療放射線技師を1名派遣した実績がある。訪問時、井東隊員は配属後約1年2ヶ月、萩原隊員は約7ヶ月を経過していた。

（1）現場視察と隊員への技術指導

国立マホソット病院は、ラオスにおける病院の最高機関として治療と教育・研修機能を持つ450床の病院である。井東隊員の活動する臨床検査部の組織細胞診室は、かなり手

狭であり業務しにくい様子がかがえたが、隊員は意欲的に活動しており検査件数も増加している。フロントライン供与の試薬等はすでにほとんど使い切っていた。

萩原隊員はICUに入っており患者の清潔ケアと体位変換に活動の視点を置いている。これに関して、看護部長から、人事考課の資料にするためスタッフの業務状況を報告してほしいとの申し出があったが、隊員としてはそこまでする必要を感じないので断ったところ、ややわだかまりが残っているとのことであった。これに対し調査団から、断ったことは判断として正しかったと考えるがもう少し明確に理由を説明すべきではないか、人事考課は看護部長に与えられた権限であり、隊員が関わることは越権行為になるという考えを伝える必要があると助言した。ICUには日本での研修経験者が2名おり、さらに萩原隊員のC/Pが研修予定である。隊員はこうした複数のスタッフとの協働は効果的であると感じているが、業務に対して全く関心のないスタッフとの差が著しいようである。隊員支援設備の酸素吸引の中央配管は有効に使われているが、10床満床になると容量が足りなくなり一部ポンベを使用していた。患者は重症者が多く見受けられたが、1日の入院費用は5万キップ（約10USドルでラオス人の一般的月給の2分の1にあたる）かかるため中途退院も多いとのことであった。高度な医療機器の導入によって患者負担が増えるという状況が発生しており、今後の機材導入時にも配属先の予算面での維持管理能力を検討することが重要と思われる。

病院幹部は院長は不在、看護部長は院内にいるがセミナーで多忙のため調査団には隊員が対応するように指示されており、隊員活動に対する関心の低さがうかがわれた。

(2) フロントライン機材の活用度

井東隊員申請による臨床検査用の試薬等の消耗品はすでにほとんど使い切られていた。一方、これまでの隊員の申請により手術室機材（蘇生器、手術台等）はかなり充実しており、訪問時もラオス人スタッフにより管理されていた。

3-8 医療技術短期大学

- ・派遣中隊員 : 三浦 隆史（シニア隊員・臨床検査技師・1代目）
- ・面談者 : Dr. Tanoi Srithirath（校長）
 Mr. Onekham Savongsy（臨床検査学部副主任・カウンターパート）

同隊員は新規派遣隊員であり、訪問時は配属後1ヶ月を経過していた。今後理学療法士学部へ理学療法士を11年度3次隊にて派遣予定。

(1) 現場視察概要と派遣隊員に対する期待（校長との面談内容）

医療技術短期大学はラオス国内で唯一の中級医療技術者養成校であり、3年制である。

現在学部は臨床検査学部、薬学部、看護学部、理学療法士学部、公衆衛生学部の5学部である。職員数は78名、そのうち教員は55名であり、他に外部講師が45名いる。学生定員数は看護学部が1学年60名であり、その他の学部は各30名となっている。

校長からのコメントとして、三浦シニア隊員とは今後も密接な関係を保ち活動がしやすいように心掛けたい、同隊員は問題があれば話し合いで解決していくという良い姿勢で活動に取り組んでいると思われるとのことであった。

また、校長によれば、協力隊は三浦シニア隊員が初代であるが、今後他の4学部へも派遣を要望したいとのことであった。看護学部は中級看護婦の養成を目的としており、今後は臨床実習の充実を図りたいとのことで、特に小児看護の専門看護婦の養成に協力を要望された。校長の考えによれば、良い病院とは看護の行き届いた病院であり、看護教育に力を入れたいとのことである。これに対し調査団からは、同感であり要請が挙げれば検討すること、また、理学療法士学部の隊員は11年3次隊で派遣予定であることを伝えた。薬学部については教育の中心は漢方薬であること、公衆衛生学部については水、食品、環境等広範囲の対応可能な人材を希望していることから、協力隊員の技術レベルでの対応は困難であることをコメントした。

三浦シニア隊員は現在授業は持っていないが、今後はC/Pと協力しながら臨床検査の実習指導の充実を図っていききたいとのことであった。

時間の都合で学内は外からの見学のみに止めた。

3-9 国立友好病院

- ・派遣中隊員 : なし
- ・面談者 : Dr. Douangchan Vanthanouvong (院長)
Dr. Khamia Liankhammy (臨床検査室医師)

同病院へはこれまで看護婦2名、臨床検査技師1名が派遣された実績がある。また、後任として、10年度3次隊にて臨床検査技師が、11年度2次隊にて看護婦を派遣予定。

(1) 今後の隊員活動への期待と供与機材の状況 (院長との面談内容)

国立友好病院は、1988年にロシアの援助で建てられた国立の中規模病院であり、現在150床のベッド数である。

今後派遣予定の隊員に対する院長の期待として、これまでの協力隊員の活動を引き継ぎながら病院の改善に取り組んでほしいこと、特に看護婦隊員においては、救急外来において婦長としての役割をとってほしいとのコメントがあった。また、さらにもう1名、泌尿器科へ看護婦がほしいとのことであり、HD(血液透析)に対応可能な看護婦を希望している。隊員のC/Pは中級看護婦3名を考えているが総婦長を加える予定とのことである。

1 1年度2次隊で派遣予定の看護婦隊員にはHD対応は困難なので、改めて隊員要請が必要であることを伝えた。この件に関しては、11年度2次隊の派遣までに多少時間があることから、派遣予定の隊員が、HDの実践は無理としても、HDの見学や自己学習等により多少の助言ができるような準備をすることが可能であればより望ましいと考える。

(2) フロントライン機材の活用度

臨床検査室には前任隊員が申請した10年度供与の婦人科検診用機材がまだ梱包されたまま保管されており、責任者は隊員の派遣を心待ちにしていた。

また看護婦隊員が導入した分娩台等の母子保健科用機材については、院長やその他スタッフが導入場所の把握はしておらず、母子保健科も昼の休憩時間で施錠されており調査できなかった。

3-10 保健医療分野隊員の技術指導の総括

ラオス国における隊員受け入れの姿勢は、保健省およびビエンチャン特別市ともに積極的であり、特にビエンチャン特別市の看護職隊員受け入れに関しては積極性を強く感じた。隊員の各配属先についても、配属先幹部の隊員に対する評価は高くいずれも好意的であった。また継続派遣と活動に対する強い期待感がうかがえた。

以下に、フロントライン計画に係る機材供与ならびに今後の隊員派遣等に関する総括を述べる。

(1) 診療・看護用機材供与

機材供与に関しては、今回調査したどの施設も、隊員活動に対する期待感の中に、医療機材・看護用具等の機器設備供与に対するものがかなり強く感じられた。医療環境充実の必要性が高いラオス国の傾向とも受け取れ、特に新規派遣施設に対しては、隊員の活動を進めるにあたって、ある程度の機材供与が必要と考えるが、一方で、機材の整備は隊員の活動に関連する範囲内での供与であるという認識が配属先には必ずしも十分でないことに留意し、協力隊活動に対する理解を今後もさらにうながしていく必要がある。

フロントライン計画により供与した機材は、一部調査できない施設があったものの、おおむね有効に使用されていた。特に本計画では消耗品の供与が可能であることの効果が非常に大きい。臨床検査部門の学童検診用器材や婦人科系の組織細胞診断用器材は有効に使われており、検診の普及にかなりの効果をあげている。今後もフロントライン計画の継続が可能であるならば、ラオスへの継続供与は効果が期待できると考える。

(2) 看護職隊員派遣の展望

保健省管轄病院に関しては、マホソット病院は院長が不在であり看護部長は多忙とのこ

とで面会できず、上層部の隊員活動に対する考えを直接確認できなかった。全体の状況からは期待感はあまり強くないようであった。しかし隊員の配属部署のICUにはC/P研修等による日本研修を経験した看護婦が複数おり、婦長と隊員はこれらのスタッフと隊員との協働によって活動効果があがっていると感じている。マホソット病院は病院規模がラオス最大であり他国からの援助も多いことから、隊員の配置はラオスの医療状況（各国からの援助状況も含め）を把握するという観点からも意義があるように見受けられるので、今後もあまり配属部署を拡大せずにICUに限定した派遣とし、経過をみていく必要があるのではないかと思われる。

ヴィエンチャン特別市保健局に関しては、9つの郡病院すべてに隊員の派遣を希望している。今回調査したポリカムサイ、シーコッタボン両病院への要請状況や、保健局へのシニア隊員の派遣要請などは効果的な派遣と考えられ、保健局の積極性も感じられるので、安全管理等の条件に問題がなければ、すべての郡病院への派遣は検討に値すると考える。

本調査では、配属先によりC/Pについての理解に差があることがわかり、調整をお願いした配属先があった。差があつて当然との考え方もあるが、病院内活動型の要請は、期待される活動内容がマンパワーのみでなく、看護の向上やスタッフ指導などの技術移転を目標としているものが多く、本調査においてもその期待を強く感じた。こうした要請内容の場合には、婦長など看護職のリーダーや管理職をC/Pとして協働しないと効果はあまり期待できない。今回の例は、医師や補助医師をC/Pとしている配属先があったため、隊員のC/Pは看護職のリーダーが望ましいことを話し、現状の医師のC/Pに更に婦長を加えるように調整を依頼した。一方、院内PHC（プライマリ・ヘルスケア）部門などの活動の場合には、補助医師が業務の中心になっているので、C/Pが特に看護職である必要はない。

1994年のフロントライン計画事前調査時と比べ今回特に印象深かったことは、ラオス国内の英語の普及状況である。ラオスは現在国家的に英語習得の気運が高く、視察した多くの配属先の幹部は英語研修で不在が目立った。ピースコーによる語学研修を行っている県もあり、前回の調査時に多かったフランス語使用に替わって、英語使用が多くなっていると感じた。隊員の習得言語はラオス語であるが、今後の保健医療分野の隊員選考にあたっては、絶対要件ではないにしても医療英語も含めた英語力も考慮することが望ましいと感じた。

（3）ラオス医療セミナーについて

1996年よりラオス派遣の保健医療分野隊員により医療セミナーが開催されている。当初は、複数の職種合同であったが、職種別専門性を深めるため昨年7月開催された第3回はラオス医療セミナー看護部会として開催された。ラオスの近年の医療事情を反映してテーマは「救急医療と看護」とし、隊員配属施設を含む17施設から45名が参加して行なわれた。企画は隊員が行ったが、準備や当日の運営にはC/Pやその他のラオス人看護婦も参画した。

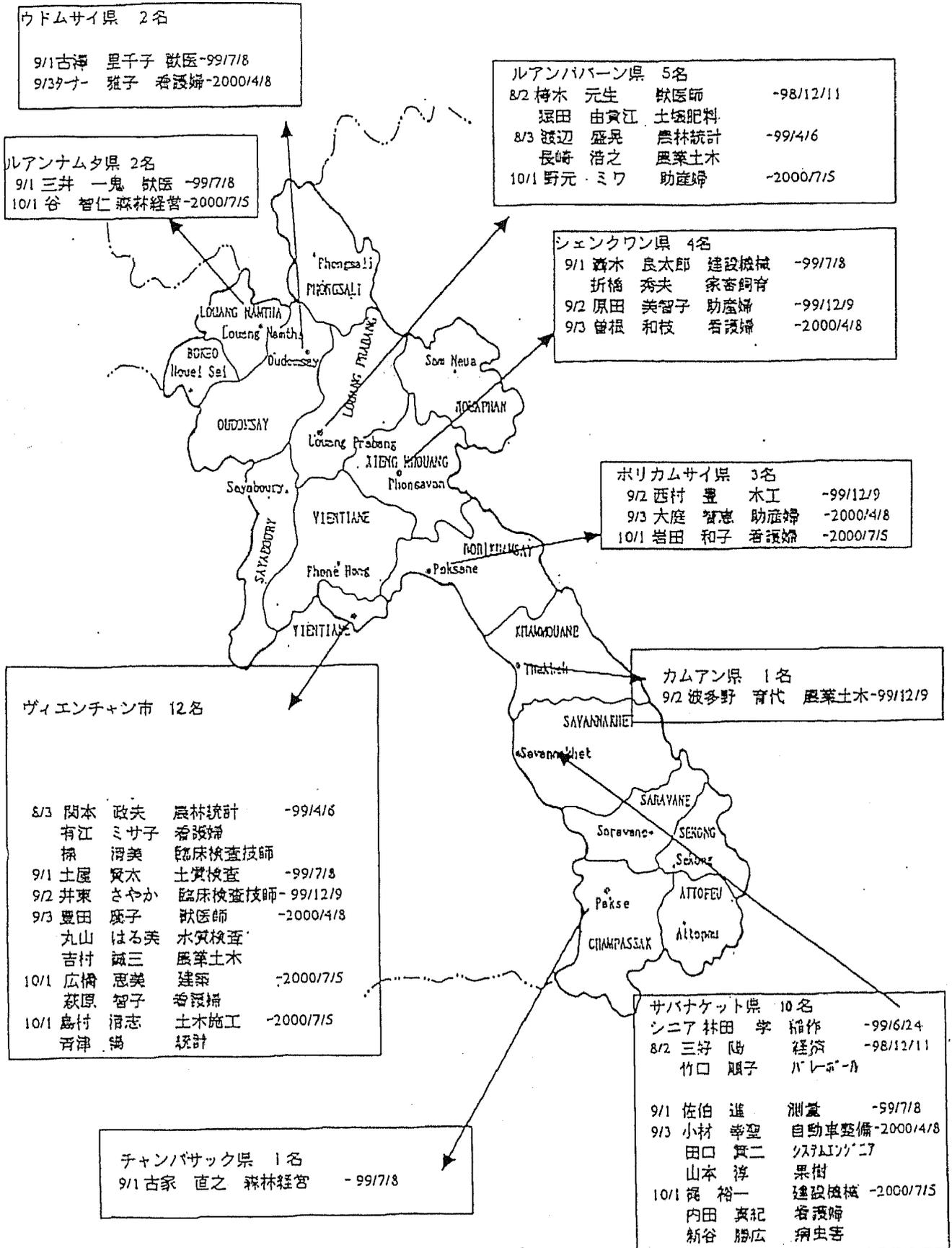
いずれはラオスの看護職が中心となったセミナーの開催、さらには、看護婦協会のような組織に発展し、ラオスの看護界の中心的存在になるような活動を目指しており、保健省系のマホソット病院看護部長やヴィエンチャン特別市保健局公衆衛生課も関心を示している。

すでに次のセミナーの準備委員会が始まっており、企画委員は2週間おきに活動の合間をぬって上京し準備を進めている。その熱意には敬服するが、本来の活動への影響や上京費用、健康管理など支障の出ないように調整する必要があるのではないかと感じた。現在は後任隊員への引き継ぎも考慮してセミナー開催時期を決めているとのことであるが、回数を重ねるに従い、必ずしも体験を通した引き継ぎの必要はなくなるのではないかと考える。医療セミナーに関してはシニア隊員の所掌事項に入っていることから、三浦シニア隊員と多少の意見交換と助言を行った。

また、現在のセミナー企画は、多くの施設の看護婦が一堂に会して切磋琢磨するという隊員の意図があるが、これは現在ラオスの看護界のリーダーともいべきマホソット病院看護部長の意向（看護界のリーダーが施設を巡って講義・教育する）と必ずしも一致しないところがあり、企画する隊員の悩みである。現在隊員の意図する効果はあがっていると思われることから、協力隊側が費用を負担して開催している限りは、隊員の意図に基づいた企画を進めていき、いずれ企画がラオス主導になっていく経過の中で検討されてもよいのではないかと考え、準備委員に若干の助言を行った。

ラオス隊員配置図 (全隊員)

1999年3月現在



ヴィエンチャン特別市保健局公衆衛生課業務概要
及び
シニア隊員業務内容案

1 公衆衛生課の主な活動

- (1) 診療所の管理、モニタリング
 - ・事業の実施
 - ・診療所スタッフの質の向上（治療、予防の観点から→健康教育）
 - ・各村への健康促進
- (2) 国際協力（渉外）
 - ・各課からの要請に基づき、国際援助機関からの資金支援の要請
 - ・ボランティア要請
- (3) STD（性病）プロジェクトの実施
 - ・医師や郡病院の問診による診療方法についてのトレーニング
 - ・民間医師のトレーニング
 - ・郡病院の管理
- (4) 診療所スタッフの質の向上へ向けたトレーニング
 - ・トピックは状況によって決める。

2 シニア隊員に期待する業務

(1) セミナーの準備、実施支援

ヴィエンチャン特別市保健局は同市における郡病院及び診療所スタッフのためのセミナーを定期的で開催したい。よって、シニア隊員には、講師として、また、セミナーのための書類や教材の準備の面での支援を期待する。

セミナーのテーマ

- ・ Health Management（健康管理）
- ・ Health Statistics（医療統計）
- ・ Community Participation（地域社会参加）
- ・ Community Development（地域振興）
- ・ 郡病院、診療所にとって有効と思われるその他のテーマ

(2) 郡病院と診療所の管理、モニタリング

公衆衛生課の職員が必ず同行するが、各郡病院・診療所への巡回指導、抱える問題点の抽出に時間を割いてほしい。そのためには、英語かラオ語が話せる必要がある。

（各郡病院の位置は次ページ図のとおり。）

ヴィエンチャン特別市シーコッタボン郡病院パンフレット



WELL COME TO SIKHOTTABONG DISTRICT
HOSPITAL

Sikhottabong district health office(SDHO)

I/ General information

SDH is situated in the central part of Vientiane Municipality, and has 77078 inhabitants (1998) , 5 communes, 59 villages. The population are farmers, the government employees, Workers and small business...

Before 1990 this hospital was a health center with a few staff, since that time it has become Sikhottabong district hospital. This hospital is quite old and damaged approximately 80 years ago.

We have required a funding for construction to the government and JICA.

Eventually JICA agreed to support us , the plan of building has been designed by Thongphanh construction company and it already submitted to the JICA office on 8 September 1997 .

Sikhottabong district health office were often helped by JICA during the past to improve the quality of service and provide many necessary equipment such as:

- INCUBATOR.
- ELECTRIC PUMP SUCTION
- MICROSCOPE ELECTRIC.
- CENTRIFUGAL.
- SPECTROPHOTOMETER
- WASHING MACHINE.
- COMPUTER.
- THE PERDIUM FOR TRAINING OF TRADITIONNAL BIRTH ATTENDANTS 680\$.
- In sum, the total JICA cooperation at sikhottabong district hospital during the last three years was 15.334\$

← One staff has a fellowship to upgrade knowledge on MCH in JAPAN .

➔ Drug revolving fund has been developed since 1993 and it could be used a lot of patients , if we have much more of fund this pharmacy will be run better.

Therefore , if we have better building, modern equipment, knowledgeable staff and adequate drugs, this hospital will be useful and can serve for the whole district population very well.

II / NUMBER OF HEALTH FACILITIES AND HEALTH STAFF:

SDHO consists:

- A District hospital and 2 Health centers.
It is runs by 49 staff:
-7 medical doctors ,
-19 medical assistants,
-20 auxiliary nurses (2 midwives, 14 general nurses, 4 pharmacists)
-One typer.
-2 cleaners.

☐ Sikhottabong District hospital has 15 beds (10 beds for inpatient and 5 beds for delivery) .

☐ The main fonctions are :

- Out patient department (OPD)
- Inpatient consultation ,
- small surgery and emergency,
- Antenatal care, Well baby clinic, EPI, Family plaining, normal delivery, gyneco-obstetric.
- Cardiology.
- Dental care.
- Laboratory examination.
- Medical check up for the applications.

The emergency section and delivery room are opened during 24 h every day.

The health services are familiarised because of having the drug revolving fund inside the hospital, good health service and faisible accessibility. ➔

III/ THE ORGANISATION OF DISTRICT HEALTH OFFICE

- Dr Keovongxay PHETDAVANH director
- Dr Viengvilay CHANTHAVONG Deputy director
- Dr Phonesavanh chief of administrative section
- Dr Hapheng PHOMMALAD chief of curative section
- Dr Phoukheo CHANTHAPASEUD responsible for emergency
- Dr Phitsamay MANYLAT responsible for OPD
- Dr Sengchanpheng THAMMAVONGSA chief of MCH section
- M.s Malaphet SACKDAVONG chief of preventive section
- M.s Bounmy CHANTHAVONG chief of Nongneo health center.
- M.s Thanomsaf CHANTHALAT chief of Khaoleo health center.

12153

J
LIB